
唐澤正平と自由大学運動

－松本自由大学と群馬自由大学－

はじめに

各地に設立された自由大学のうち、上田、伊那、魚沼・八海の自由大学については研究が蓄積されてきた⁽¹⁾。しかし、唐澤正平が創設に関わった松本自由大学と群馬自由大学については、新聞記事をもとに開講された講座が知られる程度で、まとまった研究はされてこなかった。わずかに松本市教育百年史刊行委員会編『松本市教育百年史』（同会、1978年）と有賀義人『松本平近代100年の軌跡』上巻（銀河書房、1991年）が、新聞記事をもとに唐澤に関わった松本自由大学について、自由大学の開設から消滅するまでを簡潔にまとめているにすぎない⁽²⁾。群馬自由大学については、『前橋市史』第4巻・第5巻には記載がなく（前橋市編さん委員会編 1978；同 1984）、『群馬県史』（通史編9、近代現代3）に「県都前橋自由大学が信州の自由大学運動の影響で大正十五年一月に発足する」とのみ記載があるだけである（群馬県史編さん委員会編 1990：381）。

ここでは、唐澤正平に関わった2つの自由大学について、その創設から消滅までを明らかにしておきたい。

1. 唐澤正平と信濃自由大学

唐澤正平は、1893年に長野県小県郡滋野村で生まれ、小県蚕業学校から1912年4月に上田蚕糸専門学校養蚕科に入学し、15年3月に上田蚕糸専門学校を卒業する（第2回卒業生）と、以後、蚕糸ひとすじの人生を歩むことになる。『上田蚕糸専門学校一覧』（従大正5年至大正6年）によれば、所属先として「松本市普及団」とある。この松本市普及団とは、片倉組の今井五介が東筑紫郡・南安曇郡・松本市内の蚕種製造農家と組織した大日本一代交配蚕種普及団⁽³⁾と思われる。そして1918年には群馬県前橋市の群馬蚕種株式会社、翌19年には上田蚕種株式会社に技師長として移っている。上田蚕種では、同じ年に上田蚕糸専門学校養蚕科選科第6回修業生として卒業した猪坂直一と一緒にあった。猪坂は、19年4月の就任挨拶の日の唐澤の印象を次のように書いている（猪坂 1920：26-27）。

「四月四日、其の日は自分が、上田蚕種株式会社の技術員の仲間入をした、初めての日であった。事務室の二階の百二十畳敷と云ふ、馬鹿広い会議室で、新技師長K（注、唐澤－引用者）氏及自分の就任挨拶が行はれた。新技師長は蚕業学校専門学校共に自分の先輩で、尚ほ前に二三度見識つてゐる人なので、少からず懐し味を覚えてゐる、しかし自分の記憶に存してゐるK氏は今日のK氏より、慥かに風来は貧弱であつた筈である。ところが新技師長はフロックコートを着た堂々たるゼントルマンだ。新技師長は極めて厳かな、而も齒切れのいゝ口調で——然し月並的の文句で——挨拶

せられた。『——私は年少未熟の身、一に諸君の御援助に待たねばならぬ、何事も腹藏なく吐露し合つて、会社の為め斯業の為め努力したい——』と云ふやうな意味だつた。自分は常務取締役S氏の紹介で、一同にお辞儀をただけ、社会は気味の悪いものだよ。」

技師長である唐澤と技術員である自分との会社の扱いの違いに後味の悪さを感じる猪坂であったが、唐澤が学生時代とは違う堂々とした紳士となっていた様子を記している。

それから2年後の1921年には、唐澤は上田蚕種を辞めて、長野県技師に転じている。

1921年8月に創設された信濃自由大学（のち上田自由大学と改称）は、講義をする会場探しに苦労した。猪坂は、「わが自由大学には校舎も教室も無かった。私は上田中学や蚕業学校の一室を借りようとその校長に頼んだがことわれ、市役所の片隅でもと思って細川市長に会って見たが駄目。けっきょく黎明会が役員会や懇談会にしばしば借りている市内伊勢宮の境内にある神職合議所を借りることにした」と、回想している（猪坂 1967：45）。信濃自由大学では、第1回講座である恒藤恭「法律哲学」が11月1日に開講したが、その会場となった神職合議所は、「広さは四十畳ばかりの大広間だが、畳はボロボロになって心が出て居り、建付の悪い戸口の隙からは寒い風が吹き込んで来る」（猪坂 1935：5）という状態であった。

猪坂は、1922年11月の第2期第2回講座、恒藤恭「法律哲学」から県蚕業取締所上田支所の教室を使うことになった経緯について、「これはこの年私の学校の先輩唐沢正平君が上田蚕種会社技師長より長野県技師に転じ蚕業取締所長となったので、所長の権限で教室を提供してくれたのだ」と書いている（猪坂 1967：45）。

しかし、この猪坂の回想には記憶の誤りがある⁽⁴⁾。唐澤が1921年に長野県技師に転じ着任したのは蚕業取締所諏訪支所（上田蚕糸専門学校 1921：149）で、翌22年には蚕業取締所東筑摩支所長に転じ、さらに松本支所長となっている（上田蚕糸専門学校 1922：147；長野県知事官房 1923：291）。唐澤が松本から群馬県に転任させられたときの新聞記事にも「（唐澤）氏は大正十一年上諏訪町より松本市に転任し」とある（『信濃日報』1925年4月18日）。自由大学の会場が蚕業取締所上田支所となった1922年当時の上田支所長は榊澤精一で、26年まで所長をしている（長野県知事官房 1922：288、長野県知事官房 1926：372）。榊澤は、県蚕業取締所東筑摩支所長であった1914年に、蚕繭改良策の画期的方法として一代交雑蚕種の製造に着手、今井五介、久根下美賀蔵、十時雄次郎らと相はかり、一代交雑蚕種を製造し、養蚕家に試育させたが、在来種より品質が優越していたことや、今井が中心となり一代交配蚕種普及団を組織して普及に努めたことから、一代交雑蚕種は急速に全国に普及していったことで知られる（榊澤 1938：115、高梨 2010：19-20）。したがって唐澤が「所長の権限で教室を提供」したとは考えられず、猪坂の記憶違いと考えられる。

唐澤は、猪坂から自由大学の会場について何らかの相談があったとき、自由大学運動に共鳴していたことから、先輩の榊澤に上田支所の教室を自由大学の会場として貸すように働きかけたと考えられる。これが自由大学の会場が県蚕業取締所上田支所となった経緯の真相のように思われる。県蚕業取締所の教室は、1922年11月の第2期第2回講座、恒藤恭「法律哲学」から、現在知られる限りでは24年3月の第3期第4期講座、出隆「哲学史」の講座までであるが、おそらく第3期第6回講座、佐野勝也「宗教哲学」の講座まで会場となったと思われる。

また、猪坂は、唐澤が自由大学に教室を貸したことが岡田忠彦知事の知るところとなり、「その為か翌年松本へ転任させられた」と回想しているが（猪坂 1967：45）、岡田の長野県知事在職期間は1921年5月27日から22年10月15日で（長野県編 1972：13）、自由大学の会場が蚕業取締所になったのは次の本間利雄知事のときであり、唐澤はすでに松本支所長となっている。したがって、この回想についても、猪坂の記憶違いがある。1922年の蚕業取締所支所長の異動は大規模であったため、雑誌『蚕糸』は、「信州蚕業界の大地震」と報じているが、東筑摩から小県に異動となった榊澤精一を

「栄転」と伝え、唐澤正平については「昨年春始めて諏訪蚕業取締支所長に任命された許りのホヤホヤであるが一年経つか経たぬ内に東筑摩への転任は破格の栄転であると云ふやうな批評を下すものもあるやうであるが、ソレは余りに因習に囚はれ過ぎた、残酷な盲評と云ふべきである」とし、唐澤は「上田蚕糸専門学校出身の秀才」であり、「所謂官界遊泳術と云ふものに暗く、会議や何かの時など新参者であるから、隅の方に小さくなつて居るべきが当然のやうになつて居る習慣を破り、遠慮会釈なく堂々と自説を主張する」という「其の無邪気な若々しい気概が、却つて岡田明府（注、岡田忠彦県知事のこと－引用者）のお気に召し、古参者を凌駕した抜擢の光栄に浴した訳であらふと想像する」と評している（十二楼主人 1922：18）。唐澤の松本支所への転任は岡田知事との軋轢が直接の要因であったとは考えにくい。

2. 松本自由大学の設立

唐澤正平は、1922年に県蚕業取締所松本支所に支所長として着任した。支所長時代の1924年には、猪坂直一が主筆であった蚕糸雑誌社から『實用蚕兒雌雄鑑別法』を出版している。大正から昭和初期にかけての日本蚕糸業の飛躍的な発展には蚕品種の改良とりわけ一代交雑種の開発とその普及伝播の果たした役割が大きいと言われているが、その一代交雑種の普及を側面から支えた技術革新の1つに、蚕兒雌雄鑑別法の実用化があり、それは唐澤の努力によるものであった（清川 1980）。

蚕種・養蚕農家と接触する機会も多かった唐澤は、23年ころから農村青年たちに働きかけ、自由大学の設立に動いたことが知られ、24年11月に自由大学設立の動きを伝えた新聞記事には「昨年一度発案して見ましたが機の熟さなかつたものか失敗に終り」とある（『信濃日報』1924年11月14日）。24年に入ってから再び松本に自由大学を設立すべく、蚕種農家の二木猪一、宮嶋博敦、中原元司、多田助一郎らの協力を得て準備を進め、会則、経営方針の立案を終え、会員も約30名になったことから11月18日に発起人会を開くこととなった（『信濃日報』1924年11月14日、11月21日）(5)。

唐澤は、自由大学の組織について、次のように語っている（『長野新聞』1924年11月4日）。

「自由大学はその文字の標示するが如く組織において会員たる事には何等資格等の制限をせず主として農村の青年で小学校卒業者でも最高の学問をした大学出身者でも自由に専門的に知識を開発し併せて常識の涵養を為すものであつて敢て新しからず何等奇を好むにあらず」と述べたあと、開講時期は「農閑期を利用して十月から翌年四月に至る七ヶ月間に亘つて開設し長期に亘り統一的に文化科学の研究をするもの」で、講座は「哲学概論、倫理学、法律学、哲学史、心理学、政治学、美学、宗教学、社会学、文学論、経済学、生物学」などを予定し、1講座の期間を5日ないし7日間とし、7ヶ月間のうちに6講座を開設し、講義は夜間とすること、聴講者は4、50人を「適度」とし、聴講料は1講座3円で、「是で講師の謝儀から総ての経費に充てたい」とし、「松本地方においては幸ひ農蚕家の子弟の外に市内の官衙、学校、青年会等にも熱心是れが創立に賛成し居るものあれば、役員の指導斡旋その宜しきを得ば必ず成功疑ひなしと信じてゐる」と述べている。

唐澤が松本地域に自由大学を設立しようとした理由は判然としないが、松本周辺の養蚕農家を中心とした「農村の青年」たちが学問を学び「自由に専門的に知識を開発」するとともに「常識の涵養」をはかることが蚕糸業の発展のためにも必要だと感じていたからであろう。いずれにせよ、松本自由大学の経営方針はほぼ「信濃自由大学趣意書」を踏襲していることが知られる(6)。

11月18日の発起人会は蚕業取締所松本支所で開かれ、上田の猪坂直一も同席し（『長野新聞』1924年11月18日）(7)、「場所並に開期、及講座科目や講師等に附いて具体的創立協議をなした」という。

会場は松本商業会議所と交渉し、講座は5講座とし、講師についてはそれぞれ「専門の大家に交渉をして、承認を得次第近日中に開講」することを決めている。講座科目については、(1)文学、(2)言語学、(3)哲学（哲学史、哲学概論、論理学）、(4)自然科学（史学、生物学、理学）、(5)文化科学（倫理、経済、社会、法律、心理、政治、宗教、美学）の5分野であった。この発起人会の様子を報じた『信濃日報』は、自由大学の特色について、「例の夏季大学を全く其の趣きを異にし各種の講演や講習と異なり、凡て自由意志に依り、何人も、聴講授講を有し又聴講者の職業を顧慮して毎年農閑期を利用し夜間三度間位を程度に毎月一講座宛を開き四ヶ年間を期し、一学区とし居ながらにして自由の下より上への教育を学び、且つ統一的に組織的に連続長期の文化科学を研究するのを以て、一般に大学教育講座を地方的に分散普及するを目的とする処」にあることを報じている（『信濃日報』1924年11月21日）。

また、『信濃日報』は「自由録」というコラムで「唐澤正平君等の斡旋で、松本にも自由大学が創立される行く行くは信州大学の設置が必要だ。地方有志の努力に俟つ」と書いた（『信濃日報』1924年11月28日）。

12月16日午後7時から松本市公会堂で創立発会式が開かれた。

発起人を代表して唐澤正平が挨拶を述べ、次いで創立の趣意から経過を報告し、規約その他を発表して発会式を閉じた。その後講演会に移り、自由大学協会専任理事の猪坂直一が「自由大学に就いて」と題して自由大学の意義を語り、タカラ・テルが「二つの世界」と題する講演を行い、午後9時半に閉会した（『信濃日報』1924年12月18日）。

松本自由大学は、1925年1月から開講される第1期の講座及び講師を次のように公表した（『信濃民報』1924年12月19日）。

- ・「哲学史」 同志社大学教授 谷川徹三
- ・「哲学概論」 同志社大学教授 児玉達童
- ・「経済学」 京都大学講師 山口正太郎
- ・「言語学」 文学士 高倉輝
- ・「仏教概論」 大谷大学講師 金子大栄

第1回講座、谷川徹三の「哲学史」は、1925年1月11日より5日間、松本商業会議所で開講した。参考書として指定したのは、大西祝『西洋哲学史』と波多野精一『西洋哲学史要』、阿部能成『西洋哲学史』上・下巻であった（『信濃民報』1925年1月10日）。当時の新聞記事によれば、「申し込会員百五十余名中百名近くの出席者あり同志社大学教授谷川徹三氏の哲学史から講義は始められ、講義も極めて平易にして何人にも解し易く、いづれも予期以上に得る所多き事とて、出席者は皆熱心に聴講してみた」と、講義の様子を伝えている（『信濃日報』1925年1月13日）。また、別の新聞記事では、「婦人も主婦令嬢等四人加はつてみたのは異彩を放つた」と、女性の聴講者がいたことに注目していたのが知られる（『信濃民報』1925年1月17日）。この谷川の講義は評判がよかったという⁽⁸⁾。

唐澤正平の報告によれば、聴講者は会員80名、臨時聴講生11名の計91名で、職業別内訳をみると、農業40名（44%）、商業10名（11%）、官吏9名（10%）、小学校教員7名（8%）の順で、農業者が最も多く、次いで商業従事者であったことが知られる（唐澤 1925：26）⁽⁹⁾。5回全体でも農業者が41%を占め、養蚕農家の青年たちが多く、また、商業や会社員、官吏なども10%前後を占め、多様な聴講者であったことが知られ、松本の地域性があらわれている（表2を参照）。

1月15日、第1回講座終了後、会員総会がもたれ、専任理事に唐澤正平、理事に二木猪一、宮嶋博敦、中原元司、多田助一郎（以上、蚕種業）、岡村美夫、青山善吉（以上、松本市青年）、名誉理事に土田杏村が役員として選ばれた。唐澤は、自分が専任理事となったことについて、「理事は是否土地の青年にやるべく勧めましたが皆まだ種々の意味で手が出ないらしいので結局私が専任を引受け

ました、自分の産んだもの故引受け手がなければ止むを得ないと当地に居る間引き受けることになりました」と書いている（唐澤 1925：26）。

第2回講座は児玉達童「哲学概論」で、2月10日から5日間、松本商業会議所で開かれた。受講申込者は120名に及んでいると報じられたが（『信濃日報』1925年2月8日）、聴講者は88名で、第1回講座より若干減少した。

第3回講座は金子大栄「仏教概論」で、3月26日から5日間、松本商業会議所で開かれたが、聴講者は66名と20名以上減少した。

第4回講座は同志社大学教授の中島重「国家論」で、4月6日から5日間、松本商業会議所で開かれた。中島は『多元的国家論』（内外出版、1922年）で知られていたが、このときの講義要項では、(1)国家の萌芽時代、(2)権威国家時代、(3)公民国家時代、(4)国家の将来、となっていた（『信濃毎日新聞』1925年4月2日）。聴講者は第3回と同じ66名であった。

第5回講座は山口正太郎「経済学」で、4月12日から5日間、松本商業会議所で開かれた。講義内容等は不明であるが、聴講者は44名と、第1回・第2回講座と比べると半減したことが知られる。

この山口の講義で松本自由大学第1期の講座は終了したが、この直後、唐澤正平は県蚕業取締所松本支所から群馬県への転任を命じられた。

当時の新聞記事によれば、突然の唐澤の転任は、雌雄鑑別法で蚕糸業界に大きな功績があるにも関わらず、官界に身を置きながら自由大学の創設に努めたことが県当局に睨まれたものと見ている。

『信濃日報』は、「自由大学の祟りー？ 唐澤所長の転任 東筑蚕同組合では 留任運動に奔走」という見出しで、次のように報じている（『信濃日報』1925年4月18日）。

「松本蚕業取締所長唐澤正平氏に対し本県では突如群馬県に転任を内命した事が伝はり南信地方の蚕業関係者は留任運動を開始し蚕種同業組合の幹部は去る十六日午前八時松本駅発の列車にて県当局者を訪問陳情し次で養蚕組合でも近く此れが陳情をする由なるが氏は大正十一年上諏訪町より松本市に転任し蚕児の雌雄鑑別法を発見し斯界に大革命を伴はしたが今回の転任理由は同氏が官界に身を置きながら自由大学講座の創設に努めを睨まれたものに依るらしく氏は昨十七日午前十時松本駅発の列車にて出庁し此れが善後策につき協議したが同氏の転任に対しては外部より極力阻止される模様である」

蚕糸業関係者の留任運動も功を奏さず、唐澤は4月18日、松本を去り、群馬県蚕業取締所に転任した。

雑誌『蚕糸』は、「唐澤技師は何故転任したか」という記事の中で、唐澤について、「蚕児の雌雄鑑別法を実用的に完成した功労者であり全ての方面に非常な敏腕家である。殊に多年実業界に居つた為め当業者との接触も非常によく正に良取締所長であり良技術官であつた。長野県蚕糸業の為には是非ゐて貰ひたかつたのである」と評価し、今回の転任については「世評或は氏が松本自由大学の創立に尽力した為と伝へ、或は氏の思想傾向が当局の忌諱に触れたのだとも云」われているが、「そんな理由で無い事は明かである」とし、当局者とりわけ「今や殆ど技術官の任免権を把握してゐる」取締所長太田兵太郎は、「唐澤技師の転任は主務省よりの要求で、それは群馬県の切なる希望である」と弁明しているが、「蚕種売買規則、繭売買規則問題以来の失敗山積」していた太田技師が残り、「雌雄鑑別他に功績顕著なること万人の認むる唐澤技師を他県に左遷せしめたのは腑に落ちぬ事ではないか」と指摘し、太田技師が「技術官の移動任免に対して、著しく私心を挟む不純の態度がある」ことを批判している（『蚕糸』第192号、1925年6月）。

猪坂直一は、『自由大学雑誌』に「松本自由大学唐澤正平君は今度群馬県技師に転任した結果、専任理事を辞された。同君は蚕業取締所松本支所長であつたが、今度の転任は松本自由大学の設立に努力したのが災ひしたのであると各新聞は報じてゐる。真疑の程は分らぬが、しかし同君は意気昂然、

前橋へ行ったら直ぐ又前橋自由大学を建てるんだと言つてゐる」とし、「唐澤君の後は、理事の二木猪一君が専ら事務をとる筈であるから心配はない」と書いていたが（猪坂 1925：30）、第2期の講座は開講されることなく終わった⁽¹⁰⁾。

（第1表）松本自由大学講座一覧

回	開講年月日	日数	講 師	講 座	聴講者数	会 場
	1924.12.16	1日	タカクラ・テル 猪 坂 直 一	二つの世界 自由大学に就いて	約200名	発会式兼講演会 松本市公会堂
1	1925. 1.11	5日間	谷 川 徹 三	哲学史	91名	松本商業会議所
2	1925. 2.10	5日間	児 玉 達 童	哲学概論	88名	松本商業会議所
3	1925. 3.26	5日間	金 子 大 栄	仏教概論	66名	松本商業会議所
4	1925. 4. 6	5日間	中 島 重	国家論	66名	松本商業会議所
5	1925. 4.12	5日間	山 口 正太郎	経済学	43名	松本商業会議所

（第2表）聴講者職業別一覧

			農業	会社員	商業	官吏	教員	学生	医師	その他	合計
1	谷川 徹三	哲学史	42	3	10	9	7	2	2	16	91
2	児玉 達童	哲学概論	36	12	9	7	4	1	2	17	88
3	金子 大栄	仏教概論	26	7	7	4	8	2	3	10	67*
4	中島 重	国家論	28	5	7	7	5	1	3	10	66
5	山口正太郎	経済学	14	3	7	7	5	0	3	5	44*
	合計		146 41%	30 8%	40 11%	34 10%	29 8%	6 2%	13 4%	58 16%	356

出典：『自由大学雑誌』第1巻第2号～第1巻第5号（1925年2月～5月）の「彙報」より集計。

*については、金子大栄「仏教概論」の合計は66、山口正太郎「経済学」は43となっているが、内訳の合計に従ってそれぞれ67、44とした。

3. 群馬自由大学の設立

長野県技師を追われた唐澤正平は、群馬蚕種株式会社入社以来7年ぶりに群馬県に入り、群馬県蚕業取締所に着任すると間もなく、勢多郡・群馬郡地域の蚕種農家の青年たちに働きかけ、自由大学の設立に動いた。1925年11月には早くも自由大学設立の動きが新聞に報じられている。

上毛新聞によれば、蚕業取締所の唐澤正平、勢多郡の桑島辰平その他群馬・勢多両郡の「中堅青年」たちによって「前橋市に自由大学機関を建設すべく奔走中」で、11月29日に発起人会を開き、「具体案を決する筈である」と報じ、自由大学の趣旨について、従来の「大学程度教育制度」では、「職業を廃して時間と金とを第一義」とし、「相等時間と金とに余裕のある者以外には受ける事は不可能である」が、「職業に就いて居ながらも或は相当学校卒業者と雖も就業の教育機関は殆どなく偶々講習会又は講演会の如きものがあるにしても是等はいづれも断片的にすぎないもので、それ等の者に対して大学程度の基礎を築き上げやうとするのが目的」であると述べ、講師は「東京並に京都帝大、同志社大学」等の「若手教授」で、哲学、宗教、経済、法律、文学等の批判基礎を「夜間三時間づゝ教授をなし三期をもつて卒業する筈であるが今年は取敢ず一月から三月まで開講する模様である」と伝えている（『上毛新聞』1925年11月27日）。

12月1日には創立委員会が蚕業取締所で開かれ、協議の結果、12月中旬に前橋市で発会式を挙げることに、組織は会員制度とし、12月から3月までの4ヵ月間、1ヵ月1回5日乃至7日間夜間開講、哲学、経済、社会、政治、文学、生物学等の基本教育を受けるもので、事務所を前橋市の古屋覚二方に置くことに、講師並びに講座科目は、「哲学」出隆、「経済学」山口正太郎、「心理学」大脇義一、「宗教学」佐野勝也、「社会学」新明正道、「政治学」今中次麿、「宗教学」金子大栄、「哲学」土田杏村、「法律学」恒藤恭、「文学」高倉輝（タカクラ・テル）であることを決めている（『上毛新聞』1925年12月3日）。

群馬自由大学の創立総会を兼ねた発会式は、1926年1月10日午後2時から、前橋臨江閣で開かれた。新聞記事によれば、会員は、桑島定助県議を始め群馬・勢多・利根・吾妻・北甘楽各郡から予定人員を遙かに超える150余名が参集し、その中には婦人の参加もあったという。そして、「定刻発起人代表桑島辰平氏開会の挨拶をのべて次で経過報告役員選挙を為し、講師作家高倉輝氏『文学の成立に就いて』並に上田自由大学協会専任理事猪坂氏『自由大学に就いて』の各講演があり終って講師をかこんだ茶話会に移り盛会裡に薄暮散会した」と報じている（『上毛新聞』1926年1月11日）。

記事に出てくる桑島定助は、当時、群馬県会議員であったが、1926年には「養蚕家救済ニ関スル建議」をまとめ、産業組合組織による製糸の必要性を説き、27年には組合製糸群馬社を設立し理事の一人となり、県の蚕糸業の発展に貢献した。また、熱心なクリスチャンであり、桑島辰平の父親でもあった（上毛新聞社編 2009：144-148）⁽¹¹⁾。

役員では、専任幹事に桑島辰平、会計には藍原佐吉が選ばれたことが新聞記事から知られる（『上毛新聞』1926年1月27日）。岩田松七郎によれば、運営メンバーとして集まったのは、桑島辰平、古屋覚二、大友常見、大井静一、住谷三郎、岩田松七郎らで、みな蚕種製造農家の青年たちであった。これらの青年たちは、唐澤正平の呼びかけに応じて自由大学を始め、「概して経済的にも恵まれた人々」で、「資金もこれらの人達が用意して始まった」という（山口・植原 1993b：3）。メンバーの一人である住谷三郎は、1900年に群馬郡国府村（現群馬町）に農業・蚕種業を営む住谷友太の三男として生まれた。キリスト教牧師で英文学者の住谷天来は叔父であり、当時同志社大学助手で魚沼自由大学の講師にもなった経済学者の住谷悦治は兄であった。前橋中学校時代に、萩原朔太郎や山村暮鳥の活躍に刺激を受けて文学に関心をもち、作歌への情熱を高め、文芸誌に短歌を投稿し、長兄亮一の早世ににともない、次兄悦治の学業継続の志を生かすために、悦治に請われて家業の農業を継ぐが、その後も作歌活動の意欲は衰えることはなく、1919年に『霸王樹』（橋田東声主宰）が創刊されると同人として入社、以後48年間終生、『霸王樹』と歩みを共にしたことで知られる（住谷 1969：327-340）。三郎が自由大学に関わったのは、次兄悦治に請われて家業を継がざるを得なくなり、自らの進学への思いを自由大学に託したからだと考えられる。

第1期第1回講座は、谷川徹三の「哲学史」で、2月6日より前橋男子師範学校で行われた⁽¹²⁾。

谷川への出講依頼はタカクラ・テルから行われた。タカクラが谷川に送った葉書には、「又御願です 今度唐澤君が前橋へ転任して自由大学を同地へ起し例によって小生発会式に参りました 所で第一回を是非大兄に願ひたいと必死の勢です 松本で大兄の講義の評判だけがずば抜けて宜しかったのださうで是非今度も今月末か来月にお願したいとの事です 御多忙中恐入りますが何とか御都合つきますまいか 東京から三時間です 何分にもよろしく願申ます」とある（谷川徹三宛高倉輝の葉書、1926年1月15日、谷川徹三を勉強する会編 2013：21）。唐澤正平は、松本自由大学での谷川の「哲学史」の講義の評判がよかったことから、群馬自由大学での最初の講師を谷川にする計画を立て、タカクラに依頼したものと思われる。

上毛新聞によれば、聴講申込者は156名で、地域別では桑島辰平らの住む勢多郡が最も多く、次いで群馬郡、前橋市の順になっており、職業別では農業が70%を超えており、官吏や教員は少なく、年齢別では20代が最も多く、次いで30代、10代の順となっていて、聴講者は前橋周辺の農村青年たちが多かったことが知られる（『上毛新聞』1926年2月14日、第3表を参照）。

（第3表）第1期第1回講座聴講者の地域別・職業別・年齢別調べ

	郡市名	人数	割合			人数	割合
地域別	前橋市	31	20.1%	職業別	農 業	87	71.3%
	勢多郡	79	51.3%		官 吏	14	11.5%
	群馬郡	40	26.0%		教 員	7	5.7%
	吾妻郡	2	1.3%		銀行員	7	5.7%
	佐波郡	1	0.6%		会社員	7	5.7%
	北甘楽郡	1	0.6%		合計	122	
	合計	154		年齢別	10代	16	12.7%
					20代	71	56.3%
					30代	34	27.0%
					40代～	5	4.0%
					合計	126	

（『上毛新聞』1926年2月14日の記事をもとに筆者作成）

第1期第2回講座は、タカクラ・テルの「文学論」で、2月23日から4日間、前橋男子師範学校で行われた。講義内容や聴講者の反応は知られていない。なお、タカクラは、講義の合間に伊香保に行き、遊んでいる。

第1期第3回講座は、西村真次の「日本民族の発生及び展開」で、3月18日から5日間、前橋男子師範学校で行われた。岩田松七郎は、西村の講義について、「なかなか面白い方でした。日本人が

七つの人種から成り立ったという説をたてて、論をすすめられました。かつて日本には北海道から沖縄までアイヌの民族がいたが（その遺跡が各地にのこっているとのこと）、満洲からツングース系の民族がやってきて、アイヌ民族はだんだん追われて北海道においつめられたというような講義を覚えていきます」と、語っている（山口・植原 1993b：6）。また、聴講者の一人、小林邦作は、人類学者西村真次博士の講演を「感銘深く聞いた」として、その要旨を、「富山県下のある農家の黒ン坊（ニグロ）と全く同じ赤ん坊が生れた。この児の皮フは黒褐色、髪の毛は緬羊状、唇は厚く淡紅色で、本もののニグロと全く変りはない。これは昔ある時代に日本民族の中にニグロの血が流れこんだ（混血）ことがあり、それが長い間劣勢遺伝され、かくれていたものであるが、偶然かつて分れた同じニグロの遺伝因子が結合し、表面に出てきたのである。というのであつた。博士は当時七十才位に成長したその子供の写真を示して聴講者を驚かせた。これは、日本民族は人類学上は純粋な民族ではなく、いろいろの人類が雑婚して出来上がったものであるという博士の学説を立証する一つの例として引用したもので、博士は、現在の日本民族の中にはアイヌも蒙古人も白人もまたニグロの血まで混っているのであると説明したのである」と、回想している（小林 1965：97-98）。のちに西村は、『日本文化史概論』（東京堂、1930年）の中で、「日本人は混血民衆である。日本人を構成する人種的要素（Ethnic elements）として」、ネグリト、旧アイヌ、ツングース族、インドネシア人、印度支那人、原支那人など6種類を挙げ、「外に尚ほ二三の種族を推想して見る事が出来る」という学説を説いたが（西村 1930：97-98）、聴講者の回想からは、そのような内容の講義を行ったことが知られる。

土田杏村は、1926年9月に伊那自由大学の横田憲治に宛てた手紙の中で、各地の自由大学が経営難で苦しんでいるなか群馬だけがよくいっているとして、次のように書いている（横田憲治宛土田杏村の手紙、1926年9月21日、山野編 1973：62）。

「自由大学は今年は何処ももう一つくるしみませう。世間の不景気はとてもお話になりません。（中略）

ひとり群馬の自由大学がよくいきます。但馬にも昨年から出来たのですが、これは今年は大分盛んになりさうです。しかし何としても群馬だけが、土地の関係もあります旨く行きます。」

土田の判断の理由はわからないが、次の今中次麿の講座は100名を超える聴講者があり、群馬では聴講者が集まっていた情報を得ていたからと思われる。

その第2期第1回講座は、今中次麿の「政治学」で、10月19日から5日間、前橋男子師範学校で行われた。19日の聴講者は120余名に達し（『上毛新聞』1926年10月20日）、前野良によれば、今中の講義は、「第一項、政治と科学、第二講、国家と統制、第三講、法の統一及び執行、第四講、主権論、第五講、議会、選挙、政党」となっており、1日に一講ずつ進められ、第一講では、「(1)科学的社会科学論、(2)政治及び政治学、(3)社会科学の階級性、(4)マルクシズムと政治、(5)共産主義（今中次麿『政治学大意』草稿）」という構成になっていた（前野 1983：60）。

第2期第2回講座は、松沢兼人の「経済学概論」で、12月6日から5日間、前橋男子師範学校で行われた。この松沢の講義内容や聴講者の反応などは知られていない。

年が変わって1927年1月10日に『新約』（1921年）がベストセラーとなった劇作家江原小弥太の来橋を機会に前橋人文倶楽部の主催で文芸講演会を前橋市役所で開くことになり、群馬自由大学は上毛新聞社とともに後援し、当日は、古屋覚二が司会者を務め、あいさつをしている（『上毛新聞』1927年1月9日、1月11日夕刊）。

1月23日には、午前10時より午後4時まで、特別講座として、東京朝日新聞論説委員の関口泰が「普選について」講演した。会場は前橋臨江閣であった。27年9月の普通選挙法による最初の県会議員選挙が行われるのを前に、自由大学が「普選」という時事問題を取りつかったのは、このときが初めてであった(13)。

第3期第1回講座は、それから一年後の1928年3月10日、11日の2日間、午前9時より午後4時まで、前橋図書館を会場に、岩澤正作「石器時代の上毛に就て」、福島武雄「前橋城に就て」の講義が行われた（『上毛及上毛人』第131号、1928年3月）。

自由大学では初めての「郷土的考古学」の講座が組まれた。講師の岩澤正作は、前橋中学校・高崎中学校の教員から大間々共立普通学校の教員を勤め、博物・農業・漢文を教えるかたわら、赤城山の地質・生物・鉱物等の学術調査、県内各地の縄文遺跡調査、縄文土器・石器の研究、郷土史研究を行い、1934年には「群馬の陸産貝」について昭和天皇に進講するなど、学識は広く深く、「群馬の南方熊楠」といわれた人物である。福島武雄は、早稲田大学理工学部採鉱冶金科卒で、岩澤の研究に協力するとともに、考古遺物の測定を重視し、県内の城趾研究、石棺研究に成果を上げたことで知られる（関口 2000）。岩澤の講義については、「熱心なる耳提面命に因り、僅か二日間にて関東地質上の大体より本県の実際に言及され、愈々本論に入りて我国先史時代の大綱、毛野の名の基源より石器・土器等の遺跡遺物の実況に及び、更にアイヌ民族と固有日本民族の区別又は弥生式民族と国津神の関係等を詳述し、最後に赤城火山を学問上より縦横無尽に説破して局を結びたる」と報告されているが、福島武雄の講義については、内容には触れず「帰県なき為め其の時間までも利用して補説する所あり」と書かれているに過ぎない（『上毛及上毛人』第132号、1928年4月）。

聴講者は29名と少なかったが、桑島定助、桑島辰平、大友常見、岩田松七郎、住谷三郎、大井静一らの幹部も出席しているのが知られ⁽¹⁴⁾、中には群馬郡左野村の堀口孫次郎も出席していた。堀口は、佐野地区における新田源氏の末裔の本家で、自家や地域の歴史を調べ、定家神社境内に万葉歌碑を建てたり、古代の放光寺跡に石碑を建てるなど、郷土史に関心をもっていた人物であることから、この考古学講座を聴講したものとみられる（山口・植原 1995：1-3）。また、住谷三郎は、この講座を聴講して先史考古学に興味をもつようになり、『毛野』（岩澤正作主宰）地方委員として協力するとともに、1930年には郷土の歴史・先史研究のため「国府郷土研究会」を結成している（住谷 1969：332-333）。

現在、判明している群馬自由大学で開講された講座は、この7講座である。聴講者は、その多くが前橋近辺の人々や勢多郡・群馬郡の農村の人たちで、教員や官吏はごく少数であった。岩田松七郎によれば、聴講者は、「そのころ自転車をほとんど乗っていませんから、歩きで各地から集まってきて、講義が終ると夜道を歩いて帰ったのです。そして翌日、昼間の仕事を済ませて、夕方また講義をききにやってくるという塩梅でした」と語っている（山口・植原 1993b：9、12、15）。大半の講座を受講した岩田は、自由大学で学習したことについて、「具体的にどうこうということは無いけれど、いろいろな勉強をしましたから、いろいろ役立ったと思いますね。殊に私は感受性がつよかったものですから、ガマンすることを学んだです。あの時代、自由大学で勉強しなかったら、その後の私はどうなっていたでしょうね。」と、自由大学での学びがその後の人生に影響をもたらしたことを語っている（山口・植原 1993b：13）。

28年3月の自由大学が終了したのち、『上毛新聞』には自由大学の記事は出てこない。そして28年10月8日、唐澤正平は群馬県農林技師から栃木県農林技師に転じ、栃木県庁農務課に異動している（『上毛新聞』1928年10月9日、上田蚕糸専門学校 1929：154）。唐澤の転任を報じた『上毛新聞』は、見出しこそ「唐澤技師 栃木県へ 栄転に決す」としているものの、本文では「蚕糸界にとかく問題となつてゐた本県農林技師唐澤正平氏は」とあり、抽象的な表現ではあるが、唐澤が自由大学に関わっていたことが栃木県への転任の要因の1つになっていたように思われる。いずれにせよ、唐澤が群馬県を去るとともに、群馬自由大学は自然消滅したものと考えられる。

(第4表) 群馬自由大学講座一覧

期	開講年月日	日数	講 師	講 座	聴講者数	会 場
	1926. 1.10	1日	タカクラ・テル 猪 坂 直 一	文学の成立に就いて 自由大学に就いて	約150名	発会式講演 前橋臨江閣
1	1926. 2. 6	5日間	谷 川 徹 三	哲学史	約150名	前橋男子師範学校
	1926. 2.23	4日間	タカクラ・テル	文学論		前橋男子師範学校
	1926. 3.18	5日間	西 村 真 次	日本民族の発生及展開		前橋男子師範学校
2	1926.10.19	5日間	今 中 次 麿	政治学	約120名	前橋男子師範学校
	1926.12. 6	5日間	松 沢 兼 人	経済学概論		前橋男子師範学校
	1927. 1.23	1日	関 口 泰	普選について		特別講座 前橋臨江閣
3	1928. 3.10	2日間	岩 澤 正 作	石器時代の上毛に就 て	29名	前橋図書館
	1928. 3.11	1日	福 島 武 雄	前橋城に就て		

4. その後の唐澤正平

1928年に栃木県庁農務課に転任した唐澤正平は、その後、民間企業に移り、32年に昭和産業株式会社大隅養蚕所、33年には鐘淵紡績株式会社営業部蚕業課に異動している（上田蚕糸専門学校 1932：163、上田蚕糸専門学校 1933：162）。昭和産業は、自家養蚕・自家蚕種製造の拠点として鹿児島県鹿屋町に1929年に設立され、鐘淵紡績が出資した会社であった（鐘紡製糸四十年史編纂委員会編 1965：68-69）。30年7月に鐘淵紡績の社長となった津田信吾は、当初は製糸部門には消極的経営の姿勢であったが、32年頃から製糸に関心を持つようになり、本社営業部に蚕業課を置き、昭和産業を担当させた。このような時期に唐澤は養蚕技術者として入社し、「昭和産業転換期の実行面に寄与」したといわれる。昭和産業は、34年度には「委託養蚕制度」、35年度には「小作養蚕制度」を導入したが、「世論注目的であった自家養蚕も所期の目的を達せず、不成功の形のまま終止符を打った」。36年の営業部の組織変更後、唐澤は蚕業課の養蚕主任となり、また、44年に鐘淵紡績と鐘淵実業が合併して鐘淵工業となってからは、絹業部製糸原料課長となったが、そこで敗戦を迎えた（鐘紡製糸四十年史編纂委員会編 1965：72、76、279、282）。

敗戦後、鐘淵紡績の埼玉県松山工場が新興の日本シルク株式会社の工場となると、唐澤正平は退職し、日本シルクへ移った（鐘紡製糸四十年史編纂委員会編 1965：283）。

唐澤は、1956年2月、日本の蚕糸業の発展をはかるため、アジア諸国への蚕業技術指導者の派遣及び斡旋や各国派遣蚕業技術指導者の訓練・養成、各国との蚕糸業に関する科学技術の交流などをを行う「アジア蚕業技術開発協会」の設立と、蚕糸業に関する見本・標本の陳列・展示、蚕糸業製品の

即売・宣伝・輸出並びに斡旋、絹業に関する流行の吸収及び宣伝などを行う「日本シルクセンター」の設立構想を小冊子にまとめて発表した（唐澤 1956a）。次いで57年1月には、官民一致総力を挙げて蚕糸業政策の転換をはかる推進母体として「日本蚕糸絹業協会」の結成と「日本シルクセンター」の設置を当時の農林大臣に提案し、小冊子にまとめている（唐澤 1957）。

唐澤のアジア蚕業技術開発協会と日本シルクセンター構想案については、上田蚕糸専門学校・信州大学繊維学部同窓会の会報『千曲会報』第55号にも掲載され（唐澤 1956b：1-3）、『千曲会報』第57号では、この唐澤の「提案が真剣に討議採択されるならば日本の蚕糸業に一大光明を与へるもの」と賛同する意見が掲載されている（神林 1956：2）。

唐澤は、アジア諸国への蚕糸技術指導を通して国際親善協力をはかるとともに日本の蚕糸業の発展改善をはかることにも力を注いだ。1954年4月に吉田茂内閣の閣議決定にもとづき日本と東南アジア諸国との経済技術協力を推進する目的をもって社団法人アジア協会が設立されると（アジア協会 1961：2）、アジア協会の本位田祥男事務局長や、農林委員会的那須皓・平塚英吉、中央蚕糸協会の吉田清二会長ら有力者に働きかけている。その結果、アジア協会の農業部門に蚕糸関係の委員会を設置させることに成功し、56年4月に「蚕糸業委員会」が設置され、日本の蚕糸業技術者がアジア各国の経済技術の開発に協力することが公認されることとなった（唐澤 1956c：3、唐澤 1957：1）。そして唐澤は、1957年10月から約1年間自ら、コロンボプランにより蚕糸技術専門家としてインドの蚕糸業（家蚕）を指導し、その帰途、アフガニスタン、パキスタン、ビルマ（現ミャンマー）、タイ、ラオス、カンボジア、ヴェトナムの各国の蚕糸業（家蚕）を視察調査して58年11月に帰国している。この1年間の技術指導と視察調査から得られた知見については、唐澤正平「東南アジアの蚕糸業開発と今後の日本蚕糸業」（『信州大学繊維学部研究報告』第10号、1960年）に、インドでの蚕糸業指導の詳細については唐澤正平・原田忠次『インド蚕糸業への協力』（経済技術協力叢書Ⅱ、アジア協会、1959年）にまとめられている。

その後、2回目のインド渡航が企画されたが病に倒れ、1961年3月、東京医科歯科大学附属病院で死去した。

上田蚕糸専門学校養蚕科で同期であった倉沢美徳は、唐澤正平が我が国の蚕糸業界に残した偉大な足跡として、その1は、松本蚕業取締所長時代に蚕児の雌雄鑑別法を実用化し、その鑑別手を養成し、業者が鑑別手を採用する端緒を築いたこと、その2は、鐘淵紡績在職中、失敗に終わったが、鹿児島県下で機械化大工場組織で養蚕業を計画実施したこと、その3は、戦後、アジア協会の中に蚕糸業委員会を設置させたこと、この3つをあげている（倉沢 1961：3）。唐澤は死の直前、大日本蚕糸会から蚕糸功績賞の受賞が伝えられ、5月に授賞式が行われたが、その受賞は、「多年官庁および商社にあって 蚕種の改良製造業務に従事し、特に『蚕児の雌雄鑑別』の実用化に画期的な功績をあげたこと、また最近インドをはじめ南方諸国に派遣され、蚕糸業の指導と彼我国親善に大きい貢献をしたことなど」が理由となっている（『千曲会報』第111号、1961年）。

倉沢は、唐澤の人柄について、「仕事にはファイトある旺盛な意欲で猪突猛進型性格は知あり涙ある純情型、実に愛す可き好漢」と述べているが（倉沢 1961：3）、その生涯は蚕糸の発展に情熱を傾けたことが知られる。それとともに蚕糸に関わる農家の青年たちに教養を身につけさせようと自由大学運動に尽力したのも、将来の蚕糸業の発展をみすえてのことであったように思われる。

注記

(1) 自由大学運動の研究は1960年代後半から活発となったが、この50年間の研究については、本書第8章「自由大学

運動研究の軌跡」を参照のこと。

- (2) 『松本市教育百年史』では、講師の「児玉達童」が「児玉徹童」と、山口正太郎の職名「大阪高等商業学校教授」が「京都大学教授」とする誤植・誤りがある（松本市教育百年史刊行委員会編 1978：905）。また、『松本平近代100年の軌跡』は、松本自由大学は聴講者の内訳から「必ずしも青年が中心になっていたとはいえない」とし、唐澤正平の群馬県への転任から「松本自由大学もこの時既に思想的圧迫を受けていた」としている（有賀 1991：271）。

なお、有賀義人は、上田自由大学についても言及しているが、1928年に再建されたときの上田自由大学を「社会主義宣伝機関として再建され」たとしているが（有賀 1991：275）、この評価には疑問がある。

- (3) 大日本一代交配蚕種普及団については、松本市編『松本市史』（第2巻、歴史編Ⅲ近代、松本市、1995年）を参照のこと。
- (4) 猪坂直一が主筆をしていた蚕糸雑誌社の『蚕糸』には、唐澤正平の論文が何回も掲載されており、猪坂は当時、唐澤がどこの支所長をしていたかは当然認識していたはずである。たとえば、「蚕品種整理に就て」（『蚕糸』第128号、1921年6月）のときの肩書きは「長野県諏訪蚕業取締支所長」であり、「蚕児の雌雄分離と其の実用的価値」（『蚕糸』第149号、1922年9月）のときは「長野県蚕業取締所東筑摩支所長」であり、「蚕児雌雄鑑別手の養成に就て」（『蚕糸』第159号、1923年5月）のときは「長野県蚕業取締所松本支所長」となっている。唐澤が「上田支所長」であったというのは猪坂の記憶違いというほかはない。

猪坂の回想をもとに『松本市教育百年史』は、唐澤は「上田支所長当時は『信濃自由大学』のためすすんで支所施設を貸与している」と記載し（松本市教育百年史刊行委員会編 1978：904）、堀込藤一も、猪坂の先輩である唐澤が「県立蚕業取締所長となったので、頼みに行ったところ快諾。大正11（1922）年11月の第2期の2回以降は同取締所上田支所の教室を所長権限で貸してくれた」と記し（堀込 2011：62）、長島伸一も猪坂の『回想・枯れた二枝』をそのまま引用して記載している（長島 2022：262-263）が、訂正される必要がある。

- (5) 蚕種農家の名前のうち「宮嶋博敦」は新聞記事では「宮嶋博彰」（『信濃日報』1924年11月14日）、「宮原博諸」（『長野新聞』1924年11月14日）となっているが、唐澤正平「松本自由大学便り」（『自由大学雑誌』第1巻第2号、1925年）の記載に従った。なお、二木猪一は上田蚕糸専門学校（養蚕科第8回卒業生、1921年卒業）卒業生で、唐澤の後輩にあたる。上田蚕糸専門学校卒業後は、東筑摩郡本郷村で家業の蚕種製造に従事していたが、1935年に農林省蚕業試験場一宮桑園の技師に転じている（上田蚕糸専門学校 1921：153；上田蚕糸専門学校 1935：168）。
- (6) 唐澤正平は、『信濃日報』（1924年11月14日）では、「上田市に大正十年以来設立され好成绩を修めつゝある自由大学と連絡を執」ること、講師は「上田市への講座の途次松本市に下車し講座して頂く事になつて居（注、る欠落ー引用者）から講師に要する費用は極軽少で講師方にしても他の講演会に臨むのと聴講者の気分が違ふと云つて承諾して呉れました」と語っている。

なお、松本自由大学の「規約」は、新聞記事（『長野新聞』1924年12月3日）によれば、次のようであった。

「第一条 本会を松本自由大学と称し松本自由大学の維持及発展を図るを目的とす

第二条 本会会員松本自由大学講座を聴講する場合は別に聴講料を要せず

第三条 会員の会費は一ヶ年金十二円とす

第四条 本会に左の役員を置く

理事若干名 専任理事一名

第五条 理事は会員中より選び専任理事は理事の互選とす

理事は松本自由大学の経営に関する事務を協議し専任理事は松本自由大学の経営及び本会の事務を担当するものとす

第六条 会員総会、理事会は随時之を開く

第七条 本会事務所は

尚会員外であつても松本自由大学の講座に出席する事が出来ます但し一講座（五日間）に就き聴講料として金三円を開講第一日に申受けます聴講希望者過多の場合は申込順に受付けます」

- (7) 猪坂直一は、伊那自由大学の横田憲治に宛てた手紙の中で、松本自由大学が出来ることを伝え ているが、その中で、「松本市にも自由大学が明年から出来ることになりました。この十七八日頃発会式をやる予定です。私の旧友が主としてやる事になってあるので私も創立の心配までさせられました」と書いている（横田憲治宛猪坂直一の手紙、1924年12月4日、山野編 1973：35）。
- (8) タカクラ・テルが谷川徹三に宛てた葉書には、「松本で大兄の講義の評判だけがずば抜けて宜しかったのださうで」とあり（谷川徹三宛高倉輝の葉書、1926年1月15日、谷川徹三を勉強する会編 2013：21）、これは、タカクラが唐澤正平から聞いたものと思われる。なお、タカクラは、谷川が松本自由大学に出講することに感謝するとともに、出講するときにはぜひ別所温泉に立ち寄るように、と次のような手紙を出している（谷川徹三宛高倉輝の手紙、1924年12月18日、谷川徹三を勉強する会編 2013：17）。
- 「最近には又いろいろと自由大学の件で御足労を願ひまして何とも恐入ります 厚く御礼申上ます 何とぞ将来とも御援助を願上ます 松本へ御出の節は是非御立寄りを願ひます」
- (9) 聴講者の職業別については『信濃民報』（1925年1月17日）では、講座に出席した人は93人で、弁護士1、医師4、軍人5、農業25、会社員18、商業7などとなっており、唐澤正平の報告とはやや数字が異なっている。
- (10) 松本平の地域では、松本自由大学が消滅したあと、自由大学運動の影響を受けた青年たちが中心となり、「自由大学」の名を付した自主的な学習機関が設立されている。1926年1月には東筑摩郡塩尻村の同人会の青年たちが「南信自由大学」を設立し、塩尻農学校を会場に、第1期講座として田川大吉郎「政治学」、太田水穂「国文学」、早川直瀬「経済学」、タカクラ・テル（高倉輝）「文学論」を開講している（『信濃日報』1925年12月27日、1926年1月5日）。第2期講座は、27年1月に早川直瀬「産業組合論」、田川大吉郎「政治学」、太田水穂「国文学－和歌と俳句」、麻生久「思想論－日本労働運動と普選」、内藤親義・堀内信一「課外講話」が開講され、第3期講座は、28年1月に青木誠四郎「社会心理学」、安部磯雄「政治学－現代政治思想」が開講されている（有賀 1991：276-277）。また、東筑摩郡連合青年会の元役員有志が1926年3月に組織した紫青会の青年たちにより「中信自由大学」が設立されている。紫青会は自由大学研究委員会の委員に小林静明、桐原健治、高橋蔭衛、武藤清文を選んで準備を進め、26年12月、東筑摩連合会事務所楼上で河合栄治郎の「英国思想史上に於けるトーマス・ヒル・グリーンの社会哲学」を開講している。27年1月には藤森成吉「新文学論」、12月には折口信夫「国文学」、28年3月には土方成美「経済学」、杉本孝次郎「倫理学」を開講し、8月には杉浦俊香の作品展と講演会が開かれている（有賀 1991：277-278）。南信自由大学、中信自由大学ともに28年には消滅したと考えられている。
- (11) 桑島定助の遺稿や生涯については、深沢信三編『桑島定助素像』（桑島定助遺稿集刊行会、1965年、深沢信三編『桑島定助 素像』復刊版、群馬地域文化振興会、2017年）を参照のこと。
- (12) 群馬自由大学の「哲学史」の講師は、新聞記事では、「今成京大教授」となっていて（『上毛新聞』1926年1月27日）、これまで誰なのか不明であったが、谷川徹三の証言から谷川の出講が明らかとなった。谷川は、自由大学研究会シンポジウム（1984年1月29日開催）で、「群馬自由大学、前橋、これはよく記憶しております。自由大学に参りまして、この係をしてくださったのが長野県の県庁に勤めて蚕の技師の人が係でした。名前は唐澤正平さん、唐澤さんが群馬へ行かれて、群馬に私を呼んで、第1回。このときはたくさん集まりました」と語っている。
- (13) 群馬県新田郡強戸村小作争議を指導していた須永好は、1927年9月の県会議員選挙に立候補したが落選、翌28年2月の衆議院議員総選挙では群馬県第一区から日本労農党公認で無産政党の統一候補として立候補したが落選した（須永 1986：113、117-118）。この最初の普通選挙による総選挙では、自由大学の桑島辰平が須永を推薦していることが知られる（桑島辰平「推薦状」1928年2月、星野 愷^{やすし}家文書、群馬県立文書館所蔵）。また、総選挙直後の佐波郡采女村の演説会では須永とともに関口泰が講演している（須永好日記刊行会編 1986：121）。
- (14) 当時、勢多郡富士見村で蚕種製造に関わっていた古屋雅一は、山口富造とのインタビューで、自由大学に行ったことがあるかという問いに対して、「私は行かなかったですね」と答えているが（山口・植原 1993a：9）、『上毛及上毛人』（第132号、1928年4月）の記事には聴講者として名前が記載されている。

引用・参考文献

- アジア協会 1961 『アジア協会－その七年の歩み－』アジア協会。
- 有賀義人 1991 『松本平近代100年の軌跡』上巻、銀河書房。
- 猪坂直一 1920 「蚕種会社より」(上田蚕糸専門学校『校友会雑誌』第7号)。
- 猪坂直一 1925 「松本自由大学」(『自由大学雑誌』第1巻第5号、1925年5月)。
- 猪坂直一 1935 「土田さんと自由大学」(『紫野より』第8号、土田杏村全集第8巻附録)。
- 猪坂直一 1967 『回想・枯れた二枝－信濃黎明会と上田自由大学－』上田市民文化懇話会。
- 上田蚕糸専門学校 1921 『上田蚕糸専門学校一覧』大正10年。
- 上田蚕糸専門学校 1922 『上田蚕糸専門学校一覧』大正11年。
- 上田蚕糸専門学校 1932 『上田蚕糸専門学校一覧』昭和7年。
- 上田蚕糸専門学校 1933 『上田蚕糸専門学校一覧』昭和8年。
- 上田蚕糸専門学校 1935 『上田蚕糸専門学校一覧』昭和10年。
- 鐘紡製糸四十年史編纂委員会編 1965 『鐘紡製糸四十年史』鐘淵紡績。
- 唐澤生 1925 「松本自由大学便り」(『自由大学雑誌』第1巻第2号、1925年2月)。
- 唐澤正平 1956a 『アジア蚕業技術開発協会と日本シルクセンターの構想』1956年。
- 唐澤正平 1956b 「アジア蚕業技術開発協会と日本シルクセンターの構想」(『千曲会報』第55号)。
- 唐澤正平 1956c 「社団法人アジア協会蚕糸業委員会の創立について」(『千曲会報』第59号)。
- 唐澤正平 1957 『蚕糸業の甦生策 日本蚕糸絹業協会の創立と日本シルクセンターの設置に就いて(提案)』。
- 神林浩三 1956 「アジア蚕業技術開発協会案に共鳴する」(『千曲会報』第57号)。
- 清川雪彦 1980 「蚕品種の改良と普及伝播」(『国連大学人間と社会の開発プログラム研究報告』46)。
- 倉沢美徳 1961 「唐沢正平君の死を悼む」(『千曲会報』第112号)。
- 棚澤精一 1938 「棚澤精一略譜」(『歌集句集 朝草』信濃毎日新聞社)。
- 群馬県史編さん委員会編 1990 『群馬県史』通史編9、近代現代3、群馬県。
- 小林邦作 1965 「桑島さんの眼」(深沢信三編『桑島定助素像』(桑島定助遺稿集刊行会、深沢信三編『桑島定助 素像』復刊版、群馬地域文化振興会、2017年)。
- 十二楼主人 1922 「信州蚕業界の大地震－異動支所長銘々伝－」(『蚕糸』第141号、1922年3月)。
- 上毛新聞社編 2009 『絹先人考』シルクカントリー双書、上毛新聞社。
- 須永好日記刊行会編 1968 『須永好日記』光風社書店。
- 須永徹 1986 『未完の昭和史－須永好の生涯と現代－』日本評論社。
- 住谷春也 1969 「住谷三郎略年譜」(住谷三郎『独りゆく道』新輯霸王樹叢書第46篇、霸王樹社)。
- 関口克巳 2000 『岩澤正作－人と業績－』みやま文庫。
- 高梨健司 2010 「片倉製糸の蚕種生産体制の構築－一代交配蚕種普及団を中心に－」(『専修大学社会科学年報』第44号)。
- 谷川徹三を勉強する会編 2013 『谷川徹三への手紙 高倉輝・土田杏村』谷川徹三を勉強する会。
- 長島伸一 2022 『民衆の自己教育としての「自由大学」－上田・魚沼・八海・伊那・福島・上伊那・松本・群馬・(越後)川口－』梨の木舎。
- 長野県編 1972 『長野県政史』第2巻、長野県。
- 長野県知事官房 1922 『長野県職員録』大正11年7月1日現在。

長野県知事官房 1926 『長野県職員録』大正15年8月1日現在。
西村真次 1930 『日本文化史概論』東京堂。
堀込藤一 2011 『清冽なる流れ「神川」と生きて－父・堀込義雄－』私家版。
前野良 1983 「回想 上田自由大学と今中政治学」(『自由大学研究』第8号)。
前橋市編さん委員会編 1978 『前橋市史』第4巻、前橋市。
前橋市編さん委員会編 1984 『前橋市史』第5巻、前橋市。
松本市教育百年史刊行委員会編 1978 『松本市教育百年史』松本市教育百年史刊行委員会。
山口富造・植原孝行 1993a 『群馬自由大学について(その1)』。
山口富造・植原孝行 1993b 『群馬自由大学について(その2)』。
山口富造・植原孝行 1995 『群馬自由大学について(その3)』。
山野晴雄編 1973 『伊那自由大学関係書簡(横田家所蔵)』自由大学研究会。

(2025年8月25日、一部加筆修正)